



※検印省略

三人姉妹

0093100107818937

本落丁・乱丁本は本社
またはお求めの書店で
お取替えいたします。

定価 六八〇円

発行日 一九七五年一月三十日

著者 ©高橋玄洋

発行者 竹内肇

発行所 三笠書房

東京都新宿区戸山町三五番地

電話東京〇三(二〇三)七七八一(代表)

振替口座東京二二〇九六

郵便番号 一六二

誠宏印刷／宮田製本

三人姉妹

高橋玄洋



三笠書房

三人姉妹 目次

1	凍った朝焼け	7
2	白い空洞	39
3	木枯しの詩	73
4	冬のころ	97
5	さすらい	120
6	傷ついた偶像	150
7	黒い情念	184
8	愛と死	213

三人姉妹

1

凍った朝焼け

京都の冬は寒さが深い地底から凍てついてくるようなきびしさだが、それにくらべ、東京は北風が強く肌に沁みとおる冷気だ。オーバーコートの襟を立て、首をうずめ、井沢道子は薄いくちびるを引き締め、いま、紫に明け染めてくる空を仰いだ。

朝、六時をすこし過ぎた時刻、麻布我善坊町の裏通りだ。六本木のロータリーでタクシーを降りて、ここまで小走りに来た道子は、大きな樺の木のある家の角をまがって、そこから下り坂になる道に出たとたん、正面にそそり立つ東京タワーのうしろの空が、藍墨に紅をしたたがしたように裂け、たちまちその紅が滲んでひろがり、輝き出すのを見た。

道子は、昨夜、目の前できらめいたナイフの鋭い刃を思い返した。すると、冬の朝焼けが、まるで巨大なスクリーンに映し出される臓腑と血の拡大写真のように思えて、息が止まった。

*

彼女はくちびるの内側を糸切り歯できつく噛み、長い髪をひと振りすると歩き出した。夜が朝に移りかわるこの短い時間、東京の家並みはまだ眠りの中にあるようだった。ただ、大通りを疾駆する車の排気音が、間をおいて遠く聞こえ、道子はそれを、自分の胸の空洞を吹き抜けていく風の音かと感じた。

——道の左側に、小さな二階家があった。門柱に呉服・井沢と書かれた小看板がかかっているが、それもまったく目立たない簡素な家だ。

道子は大きく息を吸い、格子戸に手をかけた。だが、そこでまた躊躇した。家の者はすでに起き出し、朝餉の支度をしているらしい。

「里ちゃん、起きた？ 里ちゃん……」

二階に向かって呼んでいる声がする。それを耳にすると、道子の凍りついていた心が、不意になごんだ。

「里ちゃん、起きてゆうたら……」

「ハイハイ、起きてますって」

あたりが静かだから、狭い家の中の声が玄関の外にまで聞こえる。階段をおりて来る軽い足音がして、台所で何やらしゃべり出したようだ。道子は温かい湯にでも浸る思いで、姉と妹のその声に耳を傾けた。

姉の眉子が京都の家を出て、ここに店を構えて何年になるだろう。妹の里子も京都の短大を卒業すると上京し、いま、この店の電話番を兼ねて代々木のデザイン・スクールに通っている。道子はいつでも、彼女たちの間に生まれた自分を幸福だと思っていた。

「だめ、おコタにあたってもたらあかんよ。新聞ぐらい自分で取って来なさい。牛乳もいっしょに」

「はい……」

玄関に妹がおりて来る。道子は玄関わきの下見板に背をはりつけ、首をすくめた。新聞配達戸の隙間に差し込んでいった朝刊が、半分こちらに出ている。妹がそれに手を伸ばす気配をうかがって、道子は素早く外から新聞を抜き取った。

「いやァ！」

妹が頓狂な声をあげ、飛びのいた。

「なに、大きな声出して？……」

台所から姉が叱った。妹はおびえた声で、新聞がひとりでに動いたと訴えている。道子は笑いをこらえ、玄関の戸を軽く叩いた。

「姉ちゃん、だれか来てる、外に……」

「阿呆なこと言わんと……え？ お客さんやて？ いまごろ、どなたやろ。あの、どなたです

か？」

姉が不審そうに上り框まで出て来て、のび上る様子なので、道子は鼻をつまんで、

「おはようございます……牛乳屋ですウ」

「ま、道ちゃん！」

姉がすぐに気づいてくれたことがうれしくて、道子は格子戸にとりつき、それを揺すぶりながら甘えた。

「早よあけて、寒いわア……」

急いで鍵をはずし、戸をあけた姉の鼻先に、道子は牛乳函から取り出した瓶を差し出して、ちよっと笑って見せてから、姉を押しのける格好で敷居をまたいだ。家の中には味噌汁の香りが満ちていた。上り框からすぐの三畳には、文庫付きの反物や丸巻きのそれが、きちんと揃えて積んである。その奥の六畳にはコタツができていて、道子はオーバーも脱がずに、まず、そのコタツに膝を入れた。

「東京も、けっこう寒いなあ、姉ちゃん」

「どうしたん、道ちゃん。なんぞ急用でもできたん？ それに荷物は？」

姉が大きな目をさらに大きくみはって言う横から、妹の里子も眉をひそめて、

「こま姉ちゃん、どしたん？」

「どしたって、来たんよ」

「来たんは見ればわかるけど……こないに朝早うから、こま姉ちゃん、どこから来たん？」

末っ子の里子は幼いころから、道子のことを小さい姉という意味で、こま姉ちゃんと呼んでいた。

「どこからて、京都からやないの」

「何に乗って来たん？ まだ、新幹線着かんでしょ」

「新幹線だけやおへん。東海道線もあれば、高速バスもあるやろ」

きめつけるように言う道子を、姉の眉子がじっと見つめて、

「あんた、ひとりやないね。ひとり？」

「ひとりよ。お店のほうで、東京支店に出張頼まれて……東京支店、人手が足らんで困ってるんやて」

道子は姉の顔を見ずに早口でしゃべった。しかし、それで姉が言いくるめられるとは思っていなかった。案の定、眉子は声をひそめて問いかけてきた。

「男の人と、いっしょやないの？」

「……そんな、いやらしい目で見んとほしいわ」

「ほんとに今朝着いたん？ ゆうべ着いて、どこかに泊ったんと違う？」

「そんなんじゃないって……うち、信用ないのね」

道子は、姉と妹の視線を弾き返した。里子が口ごもり、上の姉と顔を見合わせて、

「そやかて、こま姉ちゃん、びっくりさせるんだもん、ねえ」

「ほんととは前科があるからって言いたいんでしょ……ほら、お鍋がこぼれてる!」

道子は台所を指さし、姉が去るとコタツの上に頬を押し当てて目をつぶった。昨夜は一睡もしていなかった。京都発の高速夜行バスに飛び乗って、東京駅前に着くまで、眠ろうとしても眠れなかった。両の肩がオーバーの下で鉄のように堅く冷たくなっていた。

「里ちゃん。道ちゃんになんぞ上に着るもん、持ってきてあげ。からだの芯から冷えてるような顔してるわ」

姉が台所で言っていた。妹が二階にあがっていくと、姉は熱い茶を入れてコタツに運び、道子の顔をのぞきこんだ。少女のころ、いたずらをしたあとでそれを隠している道子に、姉はいつでもこんなふうにやさしく、そっと問いかけたものだった。

「お父ちゃんと、ケンカしたんか?」

「違う」

「じゃ、あの人と?」

「違う」

「じゃ、ほんとにひとりやね？」

道子は顔を上げ、つよく顎を引いてうなずいた。姉も真剣な表情で、

「隠したって、すぐわかるえ。姉ちゃん、きょう、京都へ行くんやから」

「……へえ、そう……行くのん」

「京染めのややこしい注文を頼まれてるし、大野屋さんに用があるねん。行ったら、あんたの勤めてる洋品屋さんにも寄ってみよ、思うてたんよ。九時半のひかりに乗る予定で、それで今朝は、いつもより早起きしたんよ」

これはカマをかけるための嘘ではなさそうだと、思うと、道子はいっそう度胸がきまり、二階から綿入れの半纏を持って来て肩にかけてくれた里子をふり仰いで、白い歯を笑みこぼした。「サンキュー！ ああ、やっと人心地ついてきた。……姉ちゃん、里ちゃん、しばらく厄介になるさかい、よろしゅうね」

* *

なぜ、私だけがこんなふうなのだろう？ と、道子は考えてみることもある。日本画家の井沢久造——と言っても世間一般には、その名も知られていないが、篤実で底抜けにお人好しの

父を持ち、三姉妹の二女として、みんなにやさしく愛されて育った。それなのに、私ばかりは我儘勝手な生き方をして、いつも家族を困らせている。そう思うと、誰の血をひいたのだろうか、道子は自分の内部にくすぶっている自我の強さをわれながらもてあます気持になって、髪をかきむしりたい衝動に襲われるのだった。

道子は中学三年生のころ、父や姉が高校へ進学するように勧めると、どうしても働きに出たいと言い張って反抗し、結局、諫められて高校に入ると、今度は高校を卒業したら働いてほしいという父にさからって、大阪の私大の国文科へ進んだ。その大学で学んだものは、いったい何だったろう？ 考えると、道子はいっそう激しい自己嫌悪で背すじがふるえた。

「人間は本来、多くの面を持っている。単一の絶対的価値観などで自分を縛りつけるのはバカだ。もっと多元的な価値観を持って、あらゆる可能性を見出すために、できるかぎり多角的な生き方をするべきだ」

そんな理屈をふりまわす大学の若い講師に心酔して、女子学生であっても成熟した女の落ち着きや知識や魅力を備えるために、もっと多くの体験をしようと誘われるまま、その男に肌を許したのが最初で、以来、幾人の男性とかかわりを持ったことだろう。そのたびに、これこそ真実の愛だと思い、醒めれば男の欠点ばかり目について、我慢がなくなるといった。だから逃げた。男は必ず追って来た。その確執のたび、道子は、自分が相手の心を傷つけたと思う

ことで、それ以上に深く傷ついた。

大学を卒業して就職したのは、京都市内の洋品卸問屋だった。そこでも新しい恋をした。田島次郎という彼女より二つ年上の青年だった。いつも片頬に薄笑いを浮かべていて、ときおり間の抜けた失策をし、上役から叱責されたり同僚から笑われても、ケロリとしているあたり、ひどく図太いのかニヒルなのか。道子はそんな田島に興味を持った。彼が、大きな図体に似合わないおずおずした態度で、愛をささやきかけて来たとき、道子は彼を可愛いと思った。

だが、田島に抱かれて一夜をとにした途端、道子は自分のあさはかな錯覚に気づいてしまった。田島次郎という男は、ただ愚直なまでに道子を慕って、その真情だけはだれにも劣らないと自負し、だから道子を幸福にできると信じ込んでいる、ごく単純な人間にすぎなかった。

ことに、彼女の肉体を獲得したことで狂喜し、その心も完全に独占したと独断して、押しつけがましく将来のことを語り、彼女の行動を規制しようとしはじめた田島の無神経さが、耐えられなかった。道子はそうなると、自分を偽ることができない。妥協や、表面だけを糊塗する方法を潔しとしない道子は、手きびしく田島をはねのけた。田島はとまどって、しつこく彼女を追いまわし、怒ってわめき、泣いて懇願した。

昨夜もそうだった。勤めをおえて帰ろうとする道子を待ち伏せていて、暗がりには引き込み、もう一度だけ話し合おうと言った。その腕をふり払って、道子は叫んでしまった。